

## 「しるし」以外に何が見えますか

### ー 全ての理性的な人々に送る『ものみーランド』でのバーチャルライフの過ごし方

ちょっと思い起こしてみてもらいたいのですが、非日常の楽しみの機会のことを。映画や劇場でも何でも良いのですが、ここでは分かり易い例として、テーマパークに行ったときの、あの感覚を呼び覚ましつつ、この文章を読んでいただきたいと思います。

私はたまに家族と「ディズニーランド／シー」に行ったりします。そこでのバーチャル<sup>※</sup>な環境造りは徹底しています。

子供たちはもとより、私もそれなりに楽しみます。

さて、ここで、ちょっと妙な話になりますが、そのバーチャルな世界から引き戻されるのが「トイレ」です。もちろんある程度その場所のテーマに沿ったデザインは施されていますが、やはり「清潔感、利便性」などから、内部は近代的なタイル張りで、自動水栓、シャワー付き便器などが備わっています。そこで、鏡に映る自分の顔をイヤでも見ながら手を洗うとき、白髪増えたなとか、見積書や請求書のこと、支払いのことなどなど、・・・を別に具体的に考えるワケではありません。

ただ、「ふと 我に帰る」というかそんな風な、「いつもの現実」の当たり前感覚に戻る瞬間であるということです。

そして、用を済ませて、再び外に出ると、またもやバーチャルな世界を、すぐさま「それなり」に楽しみます。

しかし、この間のギャップというか、言ってみれば、心なしちょっとシラけた感覚を味わうのは私だけではないだろうと思います。そして、このギャップは、その創り上げられた施設のバーチャル性の完成度の高さに比例します。

なぜなら、普段自分のうちにおいて、トイレにいつて出て来ても、何一つ何かを感じることはありません。それは「普段の日常」の中の「普段の日常」のことだからでしょう。

さて、人の、この非日常の過ごし方の中に、人の不思議な能力を見いだします。

こうしたバーチャル世界を楽しむための要素は、主に2つあるように思います。

それは「寛容さ」と「理性」です。

バーチャル世界の矛盾に対して「ま っつか」という寛容さが乏しいと、とても「楽しむ人」にはなれません。

「同じアホなら踊らなにや損々」という、私に言わせれば一種自虐的な「寛容さ」が必要です。もう一つは、それと関連していますが、「理性一時待避」の妙技です。

どこまで行っても「仮想現実」ですから、そこには守るべき約束事があります。

分かり易い一例を挙げれば、キャラクター（ミッキーでも、ドナルドでも何でもいいですが）の背中にチャックがあるのを見つけても「見なかったことにする」などです。

人は教えられたワケでもないのに、子供の内から、知らず知らずにその知恵を身に付けます。

---

※ バーチャルリアリティとは、元々、コンピュータ上に作られた世界を、実際の感覚を通して体感する技術およびその世界から派生したことばである。日本語訳では「仮想現実」「人工現実感」などと訳される。

人の内にあるこうした優れた特性のおかげで、人は「思う存分」或いは「それなり」にテーマパークを楽しむことができます。この「寛容さ」にさらに磨きをかけて、「何があってもいつでも何でもオッケー！」という感覚（果たしてこれを「寛容さ」と表現して良いかは別として）を多く持てれば持つほど、「楽しみ損ね」てしまうことが少なくて済みます。

そしてもう一つの「要素」は「理性」で、こちらは逆に「楽しみ損ね」させる原因となりかねない要素です。「理性的判断」にはこの際、休暇を出しておくのと楽に過ごせます。

また「理性一時待避」もさらに上級者になって「理性長時間待避」や「理性完全麻痺」の特質を十分に持てれば持てるほど「ずーといつまでも幸せを噛みしめ」ていられます。

さて、この話しのテーマは『ものみーランドでのバーチャルライフの過ごし方』です。すでに成就したとされる仮想歴史と実際の聖書の記述とのギャップ、聖書中に見られる、あるべきクリスチャンの特質／生活というビジョンと現実の「集会／伝道」中心の生活に見られる現実とのギャップなど、数多くの矛盾と困惑に満ちた世界の中で、「ほかの人たち」のように十分には「楽しめない」人、それどころか、精神を病んでしまうほどの苦悩と、混乱を経験してしまう人の共通した特性は、他ならぬ、「理性的な人」であることにあります。

「何があってもいつでも何でもオッケー！」という感覚にも限度があり、「到底許しがたい」現実を目の当たりにして「許しがたい」と識別できてしまう故に、如何ともしがたい「悩み」を抱え込む事になります。

実際に見聞きできる、近年の歴史と現実社会の実状を「理性」を働かせて見る限り、そこに「全能者」の介入がすでに始まっている証拠は何一つ見いだせない故に、多大の困惑を引き起こすこととなります。

ここで言う「現実」には「しるし」を含みません。なぜなら「しるし」はどこまで行っても「しるし」でしかないからです。

分かり易く、一つの例えで話しましょう。

(ルカ 17:37)「主よ、どこですか」。イエスは彼らに言われた、「死体のあるところ、そこには驚も集まっているでしょう」。

この言葉の中の「死体」と「驚」というキーワードに注目して下さい。

この文を「驚のいる所には必ず「死体」がある」と言い換える事ができますか？

できません。

どこにも死体がない時にも驚はどこかに存在しているもので、驚が飛んでいる、或いは群がっているのを見たからと言って、そこに絶対に「死体」があると断言する根拠は何もないということです。「死体」がある可能性はありますが、実際にそれを見つけるまでは、タダの可能性に過ぎません。

では、可能性を実証したいならどうしますか。

現物証拠である「死体」を探す必要があります。

そうして、くまなく探した結果、どこにもそれは無かった事が判明したとき、見たのは「驚が群がっついで」という事だけで、そこに「死体がある」というのは勘違いだったということが明らかになるということです。

実際に事件が起きたとき、容疑者の自白や、どこそこに埋めた、〇〇がその目印だと証言したとしても、そこに捜査員を派遣して、時には何十人もの人で何週間、何ヶ月もかけて、山中や水中を捜索するというケースがあります。

多大の経費と労力をかけてそこまでするのは、何故でしょうか。実証できないからです。立件し得ないからです。

これが「しるし」と「現実」の違いです。「しるし」（とみなしたもの）が見られたとしても、それを裏付ける現実がない限り、それは単なる「しるし」（とみなしたもの）に過ぎません。現実が生じた「世界戦争」それに続く「疫病、食糧不足、地震など」が聖書預言の「しるし」にちがいないと捉え得たとしても、それは、目印であり、それが成就であると言うなら、指し示す先に実体が存在していなければなりません。「あなたの臨在と世の終わり」という出来事が現実に行き起きているという実体です。

ここで思いに留めるべきは、信仰でも思い込みでも無く、またどんな人為でもなく「神の介入」を証拠付ける「現実」の有無です。」

さて、ここで、もう一つ別の側面からの例えで、このことを示してみることになります。

それは「進化論」です。

生物進化は「世界史」の教科書の最初のページで扱われています。すでに「歴史の事実」として扱われ、認められているにも関わらず、今日に至るまで依然論議が絶えない、一つの「仮説」としての「進化 - 論」「進化 - 説」から逸してはいません。

ある人々にとっては、すでに実証済みの歴史の事実そのものという認識であり、別の人々にとっては、「唯の仮説、或いは完全な誤り」という認識が存在します。なぜ、この時代になってさえ決着がついていないのでしょうか。

「証明する絶対的事実」が無いからです。多くは要らないでしょう。たった「ひとつ」の証拠さえあれば決着を見ることになります。

と言うことは、ある人々が、圧倒的、決定的として提供する「証拠」とされているものもすべて「しるし」に過ぎないということでしょう。

例えば、具体的な例で言えば、「化石」です、「種と別の種を繋ぐ生物の化石」、つまり進化の途上にある化石が、ただの一つでも見つければ、すべて解決するのです。しかし、無数にある論議や化石証拠などのどれも、示し得るのは「可能性」であり、「事実」という証拠ではないゆえに決着を見ないのです。

或いは、今日「地動説」か「天動説」かに論争があるのでしょうか、一部の人が信じているだけで、大多数の人は認めていないという現象があるのでしょうか。それが無いのは、単なる主張だけで無く、誰でも認める事実が明らかだからです。

さて、話しを元に戻しましょう。

仮に、終末に関する預言の「しるし」が成就している故に、「今は終わりの日です」とい

う主張を、ある人々が確信しているとしても、別の人（人類のほとんど）は認めません。何故でしょうか。現実の証拠が皆無だということに他なりません。誰にでも認めうる、キリストが王（世界の支配者）としてすでに実権を摂り、その力を地に対して行使しているという証拠が唯の一つでも、あれば、決着がつくのです。決着がついた上で、それを個人的に受け入れるか、拒絶するかという個別の態度は当然それぞれに生じるでしょうが、「しるし」以外の何も存在しないうちは、すべて、それ以前の問題です。

なぜ、「証拠」が必要なのでしょう。それは、問題自体がそういう性質の問題だからです。聖書預言が本当に預言なのか、そもそも神は存在されるのか、聖書はその神の言葉なのか。これらは確かに信仰の問題です。

しかし、成就したとされているものには「信仰」を働かせる余地はありません。たとえ肉眼で見ることのできない事象であったとしても、認める得るものは認め得ます。認められる事実が存在しない限り、それは存在しないか、一つの「説」に過ぎません。こう断言できるのは人間の「理性」によります。

少なくとも、謙虚に、現実的に、理性的に表現して、「しるし」から認められる「キリスト臨在 - 論」もしくは「臨在 - 説」と表現すべきではないでしょうか。

持ち前の理性や正義感が邪魔して、エホバの証人として生きる事に困惑、違和感をお感じの方、数多くの聖書に基づかない、(人間による)「自ら課した崇拜の方式」、会衆の内外にみられる「見せかけの謙遜」、「兄弟姉妹」と呼び合いながら、いじめ、無視、権力争い、ごますり、などに明け暮れる人々など、もしあなたが「日々彼らの間に住んで見聞きする事柄により、自分の義なる魂に堪えがたい苦痛を味わっていた」義人ロトのようであれば、「平和」を求めて、自分の良心の声を押し殺し、「自分は道理をわきまえていると思って、道理をわきまえない人たちを喜んで忍んでいる」のをもう止めて、むしろ、一層の理性を働かせ、「ふと 我に帰り」、全ての現実と、聖書そのものを調査し直すなら、「霊的パラダイス」だと繰り返し刷り込まれている世界が、実際には神のことばが示しているメッセージとはかけ離れたものであり、まったくのバーチャルランド、人間の解釈と勘違いによって徹底して創り込まれた仮想世界「ものみーランド」であることにお気づきになるでしょう。

